

乾隆帝の茶詩からみる清宮廷の喫茶文化 ——その一 『樂善堂集』をめぐって

顧 雯*

A Study on the Court of Qing-dynasty's Tea Culture by Examining /Qian-long / Emperor's Tea-poems Part I : On /The LeShanTang/

Gu. Wen

(Received OCTOBER 31, 2009)

Abstract

The purpose of this paper is to examine the root reason why the Emperor Qian-Long (r.1736-1795) of the fourth emperor of the Qing-Dynasty had paid so much attention to enjoy drinking and processing tea. Moreover, this paper aims at discovering the traits hidden behind his "Tea Poems", such as kinds of tea offered to the Emperors during the Qing-Dynasty and also finding out how the Emperor Qian-Long cultivated himself in the field of tea. In addition, this paper analyzed the "Tea Poems" of "LeShanTang" which is the poetry collection of works of the Qian-Long when he was an imperial prince. Finally, by examining "Tea Poems" about Wu-yi and Pu'er that are representative kinds of tea during the Qing-Dynasty, it was clearly shown that the Qing-Dynasty had its own original culture about tea which was quite different from the one during Ming -Dynasty.

キーワード： 乾隆帝 樂善堂 乾隆帝皇子時代の茶詩 清宮貢納茶 清宮廷茶道具
武夷茶 普洱茶

はじめに

従来の中国の茶文化研究において、近世の茶文化は「明清の茶文化」として一括されるが、実際には明代（1368－1643）の茶文化を中心に考察が展開されていることが多い。なぜなら、清代（1644－1911）入ってからの茶文化は、ほとんど明代のものを受け継ぎ、発展させたものである、という認識が一般的であったからである¹。しかし、清代には発酵茶、特に現在もよく知られている福建の烏龍茶、紅茶が新しく誕生した。雲南の普洱茶も清代に登場した新興の茶であった。また、海外貿易においても、茶は特に重要な輸出商品であった。それにも関わらず茶文化史の分野において、清代の茶文化が検討されることが少なかったのは、同時代の優れた茶書が少ないことにある。特に清代に登場した武夷茶や普洱茶についての情報は非常に少ない²。

十八世紀の中国は、「康乾盛世」と称され、前近代中国の黄金時代であった。その中心人物である乾隆帝（位1736-1795）が60年の治世に遺した事跡は偉大で、現中華人民共和国の領土は彼の治世の間に形成されたものである³。乾隆帝はまた多産な詩人でもあった。彼の詩を集めた『御製詩集』に収められた詩は43630首ある⁴。彼の詩については文学的な価値と共にその史料としての価値も注目することができる⁵。これら詩の中に品茶に関するものがあり、清代の茶書の少なさをこの乾隆帝が詠んだ茶詩により補うことが可能である。本稿では、乾隆帝の皇子時代の詩文集である『樂善堂全集定本』⁶を検討することにより、清代飲茶文化研究の一環として、清代中期の中国茶の様相を究明していきたい。

一、『樂善堂全集定本』の茶詩と清宮貢納茶

1、『樂善堂全集定本』の茶詩

『樂善堂全集定本』（30巻、詩17巻）は乾隆帝の『御製詩文集』に含まれる最初の詩文集であり、乾隆帝の皇子時代（1711～35）に書かれた文220篇・詩1080首を収集している。乾隆帝は皇子時代

* 東海大学総合経営学部マネジメント学科准教授

の雍正八（1730）年、20歳の時、14歳以降に作った詩文をまとめた『樂善堂文抄』を編集した。『樂善堂全集定本』には、乾隆帝元年と二十三年にそれを修訂した際の序が付いている。また詩文の年号から、『樂善堂全集定本』に収集されている35首の茶詩は、すべて雍正二年（1724年）から雍正十三年（1735年）間のものであることが判る。樂善堂とは、乾隆帝が自分の書斎につけた名である。この時期にこの書斎で、乾隆帝は詩をはじめとして、他の文芸を磨き、またそこで茶についての研究と実践（品茶）が行われたと考えられる。

本稿であつかう茶詩とは、茶摘みから茶の製造、茶道具と茶の飲み方など、広く茶に関係している内容を主題としている詩である。晋代から清代にいたるまで、茶詩の総数は1700～800首にもものぼり、茶詩は中国文学のみならず、茶文化の貴重な遺産でもある⁷。

乾隆帝の詠んだ詩にも茶詩が多く、また品茶の記録も多い。乾隆帝の詩文集『御製詩集』の中には、茶を直接のテーマとした茶詩が400余首あり、茶をその内容に含む詩が1000首以上ある。乾隆帝

いちじつは晩年に「君一日も茶無かるべからず」⁸（君不可一日無茶）と言われるほど品茶を愛好していた。

『樂善堂全集定本』の茶詩について、従来の研究では、その一～二首だけを採り上げ、簡単に注釈を付けて紹介したものがあるにとどまり⁹、乾隆帝皇子時代の茶詩に関する全体的考察はまだない。本稿では、『樂善堂全集定本』から抽出した茶詩35首を素材に、乾隆帝の皇子時代の清朝宮廷の「貢納茶」の種類と茶詩の内容を分類する。これらは乾隆帝皇子時代の茶についての体験と考証を記したものである。また、その中に現れる「武夷茶」と「普洱茶」に特に注目し、その内容と意義を検討する。

2、『樂善堂全集定本』にみえる清宮貢納茶

乾隆帝の茶詩は清朝宮廷の茶の行事、茶の歴史を記したものであるが、その茶詩に表現された茶は、宮廷に献上されたものであり、すべて「貢納茶」である。「貢納茶」とは、各地方から朝廷に献上された特産品の茶をいう。唐代には「貢納茶」の種類は十数種類あった。宋代になると、「貢納茶」を生産する地域と規模がさらに大きくなる。清代にいたると、「貢納茶」の産地は更に広がり、その種類も現在の製茶法による「六大茶」をすべて備えることになった¹⁰。現在、中国において名茶と言われる浙江の「龍井茶」、福建武夷の「大紅袍」、福建安溪の「鉄観音」は、すべて乾隆期に「貢納茶」となったものである。清代の「貢納茶」は品種が多く、清朝宮廷の茶事も盛大になっ

ていった¹¹。

一般に明清時代の茶については、明の太祖朱元璋（1328—98）の時に「龍団の製造を止めさせ、茶は茶芽（葉茶）として献上させた」¹²とあることから、それ以後、団茶に代わってもっぱら芽茶（葉茶・散茶）が広まっていた、と考えられている。

しかし、『樂善堂全集定本』を見ると、乾隆帝の品茶における種類は、芽茶に止らず、広い範囲の地方の茶と多様な種類の茶を用いたことが判る。武夷茶をはじめとする福建省から、普洱茶を産する雲南省までの「貢納茶」が登場する。季節による分類である「雨前茶」（「雨前茶」『樂善堂全集定本』巻16、以下巻数のみを記したものはすべて『樂善堂全集定本』のものである）も見え、外観分類による「小団」（「烹雪用前韻」巻19）と「小龍団」（「冬夜煎茶」と「丈室」巻15）等の品名を見ることが出来る。また「武夷」茶類となる「鄭宅茶」（「鄭宅茶」巻15）、「橄欖茶」（「橄欖茶」巻27）、「葵花・玉（革夸）」（前掲「冬夜煎茶」）、「接筍峯」（前掲「冬夜煎茶」）茶等が見える。「貢納茶」詩に、はじめて「普洱」（前掲「烹雪用前韻」）という茶の品名を見ることが出来る。なお、茶の雅名として「清茗」¹³（「祀竈畢啖糖錫」巻15）、「雀舌」（前掲「烹雪用前韻」）、「苦茗」（「夜臥聽雨憶平郡王」巻20）、「槍旗」（前掲「雨前茶」）、「乳香」（「二月十一日晚烹雪水偶成」巻16と「夏興三十首」巻30）と多種多様な呼び名が見え、皇子時代の乾隆帝が茶について幅広い見識を有していたことが窺えよう。

ここで、「雨前茶」についての茶詩を取り上げてみよう。「雨前茶」とは穀雨の前に茶摘みして造った茶であり、上品茶とされる¹⁴。清代江南の高品質な雨前茶は宮廷に献上され、「貢納茶」に指定されていた。『樂善堂全集定本』に「雨前茶」（巻16）と題する次のような茶詩がある。

穀雨前、春雷後、色染鶯黃新上柳、
携籠男婦谿山走、爭試採茶三昧手、
日烘山腰暖碧雲、槍旗半吐搖酣春、
賣與商人博衣食、徒勞曾未沾其唇、
伊余品泉逸興賒、吸罷還憶貧民家、
新絲新穀都已賣、即今又賣新芽茶。

これは春の茶摘みについて詠まれた詩である。茶摘みの季節については、唐の陸羽（733—804）の『茶経』（三之造）に「凡そ茶を採るに二月、三月、四月の間に在り」と季節に幅をもたせて茶を摘むのがよいとされている。

また、唐の白居易（772—846）が「緑芽十片、

火前の春」(緑芽十片火前春) (「謝季六郎中寄新蜀茶」) という名詩句を残している。冬至後の105日目、四月五日ころ、清明節の前日は、火を使わないで冷たいものを食べるという慣例があったため、火の使用を禁ずる「禁火」の日であり、その日を「火前」という。この頃に採った茶はすべて春の新茶となる。火前茶(或いは清明節の前という意味の「明前茶」)、雨前茶の呼び名は、現在まで使用されている。

なお明清時代になると穀雨前の茶が上品茶、即ち良い茶とされる。例えば明の銭椿年『茶譜』「採茶」に「穀雨の前後に收むる者を佳と為す」と記されている¹⁵。清の「雨前茶」は明代の茶摘みのよいとされる季節が援用されている。

乾隆帝皇子時代の茶詩「雨前茶」は、旬の雨前茶を男女が一心不乱に摘む風景を詠み、また文人の雅士としてその情趣を忘れず、啜茶を楽しむつも、貧しい農民の生活苦に思いを寄せ、「民意を休恤する」(休恤民意)、民の身になってその生活を憐れむという気持ちをも表現している。

二、『樂善堂全集定本』の茶詩分類

『樂善堂全集定本』において、茶に関係している詩は、先述のように35首を見出すことができる。この35首の茶詩は、以下のように大きく四つに分類することができる。

①烹茶の題詠類、②寺院僧茶の題詠類、③宮廷茶具の題詠類、④「文芸と茶」の題詠類である。以下、①から④までの類別に従って、乾隆帝皇子時代茶詩の内容を考察してみたい。

① 烹茶の題詠類

烹茶の題詠類とは、「清宮貢納茶」を煎ずることを主題とする茶詩で7首ある。武夷茶については「冬夜烹茶」に、「橄欖茶」と「鄭宅茶」を題として詠んでいる。普洱茶については「烹雪用前韻」に、また「香乳」(茶)については「二月十一日晚烹雪水偶成」に、それぞれ詠まれている。その他「烹茶」と「石坂烹雲」を題とする各一首がある。茶の種類を判別できる武夷茶に属する3首と普洱茶の1首は、第三節で考察することにして、ここではその他の詩についてみてみたい。

まず、一首目に、雍正五(1727年、17歳)年頃の作¹⁶、「二月十一日晚烹雪水偶成」(巻16)を取り上げる。詩文は以下のとおりである。

仲春漫天飛瑞雪、不異甘霖及時節、
預卜二麦兆豐収、田夫村叟咸歡悅、
吾曹此樂正有余、清興更與尋常別、
呼僮簾幕為收取、滿貯磁缸水甘冽、

晚來活火事煎烹、一甌香乳看清絶、
自啜自省沁詩脾、銀蘭焰長光明滅、
因思上蒼霏瓊霰、祇縁大地春方茁、
如何吾曹擅妄取、但為口腹供飲啜、
復思此法古有之、清味不須和梅鬻、
吾曹所飲能幾何、万物資生亦不缺、
竹炉茗椀相周旋、哦詩夜半寒更徹。

この詩は、二月仲春、瑞雪が漫天に舞ったが、その雪を集めて茶を煎じて楽しんだ時のことを詠った詩である。「瑞雪は豊年を兆す」(瑞雪兆豊年)として、田夫と村翁と帝は喜びをともにしようと思い、その雪で茶を煮ることを思い立った。侍童を呼んで簾をひいて雪を集めさせ、茗椀と竹炉との間に周旋しながら、甘く清らかな雪水で茶を煎じる風流な遊びを行ったのである。

乾隆帝皇子時代のこの詩文には、「天下の憂いに先んじて憂い、天下の楽しみに後れて楽しむ。」(先天下之憂而憂、後天下之樂而樂)という心境が行間に見てとれる。これは祖父、康熙皇帝の教育に関係しているように思われる。康熙帝は、幼い時から裕福で安定した生活を約束された乾隆帝に、人間の幸せを知るだけではなく、君主として担う責任をも認識すべきであると教えた¹⁷。この詩にも常に「資生養民」の大計を考えながら、「後樂」として熟練した手業で茶に興じる「清絶」なる境地を見てとれ、一国の君主たる資質を備えようとする姿勢が窺える。

二首目は、「烹茶」(巻29)と題する詩である。

梧砌烹雲坐月明、砂瓷吹雨透煙輕、
跳珠入夜難分点、沸蟹臨窓覺有声、
靜院塵根心地潤、閑尋綺思道茅生、
誰能識得壺中趣、好聽松風瀉處鳴。

この詩は、煎茶の中で軽やかに茶の余韻を楽しんだことを詠んでいる。茶を煎ずることは「烹雲」といい、水を沸かすときの、蟹の眼ぐらいに水の泡がたち始めた頃の沸き具合を「跳珠」と「沸蟹」というが、その表現は風雅にして細緻である。乾隆帝が、名月のもと、梧桐樹の蔭下で心静かに喫茶を楽しんでいる様子が窺える。

三首目は、「小園開詠十五首」(巻27)中の一詩で「石坂烹雲」と題する烹茶詩である。

敲火烏卿熾、烹雲玉液清、
龍團曾未点、魚目已旋生、
漫說腸堪潤、応知眼倍明、
披襟成小啜、孤鶴一声鳴。

この詩も、茶を煎じることを「烹雲」といい、茶のことを「玉液」と詠っている。火を焚き、炭を燃やすという煎茶の基本手順からはじめ、水がすでに魚の目ぐらいに水の泡がたち始めたら、高級茶である龍団をまだ用いていないのに、その雰囲気ですでに潤った、と詠う。茶を一口啜り、孤鶴の一声に吸いこまれていく気分を詠んだ喫茶の一場面である。

② 寺院僧茶の題詠類

寺院僧茶の題詠類とは、皇子時代の乾隆帝が寺院を訪ねた際の僧の茶について詠んでいる詩である。この題詠類の詩には禪の境地に関する詩句が多い。これは、乾隆帝本人が禪や僧茶に傾倒していたにことよると考えられる¹⁸。皇子時代の乾隆帝の詩中には、「趙州茶」と「高清」といった表現がしばしば見られる。

『樂善堂全集定本』には、寺院に赴いて詠まれた、禅僧と茶に関する詩句が5首みえる。皇子時代の乾隆帝は、北京近郊の寺院へよく出かけていた。その寺院には、萬壽寺や海法寺、それに燕京八景の一つである「西山晴雪」で知られる場所、現在の「香山公園」にある寺院が含まれる。

萬壽寺は現北京海淀区にある唐代に作られた寺院である。清代には皇室を守護する寺院として、特別な地位を有していた¹⁹。この格式高い宮廷寺院で、乾隆帝が「萬壽寺方丈小憩」（巻30）に「蕭閑山水嘉、闍黎公案熟、讓客趙州茶」と詠んでいる。そして、「過覺生禪房」（巻21）に「禪房花木香、小憩耽清景、…且喫趙州茶、莫問雲門餅、歸騎漫教催、余霞亘西嶺」と詠んでいる。この詩には、花木の香る禪房の中で、趙州茶を喫しつつ、西嶺にたなびく霞の中で、清らかな憩いに耽る情景が詠われている。

また「雨中訪僧不遇」には「留得蒼松伴客茶」（巻30）と詠んでいる。残念ながら訪ねた禅僧には会えなかったが、寺院の留守をまもる「蒼松」を相手に「客茶」を満喫した様子が詠われている。

禅僧が茶を煎じる情景について具体的に詠んでいる詩に「遊海法寺即景」（巻21）がある。この詩には「禅僧坐方静、悄然石竈煙、為我烹苦茗、尋古断碑存」とある。禅僧が静かに座禅している傍らで、石竈から煙がたち昇っている。自分のために「苦茗」を煎じてくれ、今に残る古碑の断片を尋ねた、という意である。これは、「西山晴雪」（巻22）に詠まれているように「寒凝澗口泉猶凍、冷逼枝頭鳥不鳴、只有山僧頗自在、竹炉茗椀伴高清」と同じ境地を詠んだものである。乾隆帝が、禅僧の自由自在な精神世界を象徴する「竹炉茗椀」の高清な境地に憧憬の念を抱いていたことが窺える。

③ 宮廷茶道具の題詠類

乾隆帝は、しばしば茶道具について言及している。清朝の最盛期、康熙・雍正・乾隆の時代は、その宮廷の豊かな財力を背景に、景德鎮の官窯が繁栄を極め、優れた茶器を産出していた。乾隆帝は、宜興の朱砂茶壺を「世上茶具之首」と称えたが、宜興は紫砂器の優品を生み出していた。この時期の茶道具は精緻を極めていたといえる。

『御制詩集』には宮廷茶道具の題詠類は90首余り、とくに竹茶炉を詠んだ詩だけでも70首余りがある。その他に、茶碗や茶盤、茶托、茶銚、木刻茶画屏風などの茶道具についても言及している²⁰。

茶碗について、具体的な焼き物の名を挙げたのは、「定州花瓷」の茶碗（「冬夜烹茶」巻15）の一例だけである。その他には、「瓷甌」（「烹雪用前韻」巻19）、「磁甌」（「橄欖茶」巻27）、「氷甌」（「鄭宅茶」巻30）と「茗椀」（「西山晴雪」巻22）の四種類を挙げている。

茶壺について、「砂瓷」壺（「烹茶」巻29）と「玉壺」²¹（「孟春十日夜偶成十六韻」巻24）の二つを挙げている。

風炉については、茶鼎と呼ばれ、石製のものは「石鼎」、竹製のものは「竹炉」とよんでいる。「石鼎」については、「冬夜烹茶」（前掲）、「鄭宅茶」（前掲）、「夏興三十首」（「藥炉茶鼎興偏孤」巻30）と「夏日寄龍翰傳先生」（「石鼎烹茶泛乳香」巻29）の4首の詩の中でとり挙げている。「竹炉」については、「竹炉茗椀伴高清」（前掲「西山晴雪」）と「竹炉茗椀相周旋」（前掲「二月十一日 晚烹雪水偶成」）と詠んでいる。

煎茶の時に使う釜も詩に詠まれている。詩の中では「茶鑪」²²（「夏日園居即事」巻30）と呼ばれ、石製のものは「石鑪」（前掲「烹雪用前韻」）とよんだ。

また茶を盛る竹製の器具である「建城」については、「冬夜烹茶」（前掲）と「烹雪用前韻」（前掲）の2首の詩に登場する²³。

詠茶詩に茶道具を詠んでいるのは当然なことだが、詠茶詩ではない詩の中で煎茶を表す詩語として借りることもある。この場合では、茶道具が茶事全般を象徴する役割を果たしている。その例は、『樂善堂全集定本』に2首ある。一首目は、「夏興三十首」（巻30）に「藥炉茶鼎興偏孤、…好作高齋消夏図」とある。二首目は、「夏日園居即事」（巻30）に「鶴習茶鑪不避煙」とあり、茶鑪と鶴が呼応している情景を詠んでいる。

④ 「文芸と茶」の題詠類

「文芸と茶」の題詠類とは、文芸の嗜みに喫茶を添えることによって、「清趣」の相乗効果があ

られることを詠んだ詩である。中国の芸とは古代よりの「六芸」²⁴があり、後世に文人・士大夫の教養とされたのは「琴・棋・書・画・詩・香・花」などの諸芸である。明人の文人の生活は「浄几明窓、一軸画、一囊琴、一雙鶴、一甌茶、一炉香、一部法帖……」などに囲まれているのが理想のかたちであった²⁵。乾隆帝も諸芸を嗜む中に喫茶を添えることによって、一層雅趣を高めようとしていたのだろう。以下に文芸を八つに分類し、具体的な詩を挙げてみることにする。

1. 「絵画と喫茶」：絵画を鑑賞しながら、絵画などに描かれた烹茶の境地を詠むものである。乾隆帝はその地位により、一流の絵画を独占的に鑑賞する機会に恵まれていた。『御製詩集』にはこの類の詩は、77首余りがあり、明の唐寅（1470－1523年）の茶画に関する詩だけでも23首ある²⁶。『樂善堂全集定本』には2首ある。そのうちのひとつが、唐寅の絵画に関するもので、「唐寅山静日長図」（巻18）と題して「静対転増慙、烹茶洗鬢芥」と詠んでいる。

もう一首は清の宮廷画家、唐岱（1673-1752年後）の絵画に関するものである。その「題唐岱畫頁湖山春曉」（巻28）の中では、「何須蠟雙屐、小閣坐烹茶」と詠まれている。ここにいう「蠟雙屐」とは南朝の阮遥集が木屐をはくことを好み、よくそれに蠟を塗って磨いていたことから、後に、山水に歴遊する閑適な隠遁生活を象徴するものとなった。ここでは、「蠟雙屐」の替わりに小閣に坐して烹茶することで、その境地を表そうとしている。

2. 「古典と煎茶」：古典を鑑賞しながら、その古典に書かれた烹茶の境地を詠んでいる詩が1首ある。「雪事八詠・陶穀烹雪」（巻28）と題する詩で、「削玉更鏤珠、寒烹清味殊、天香沁肺腑、冷色上眉鬚、玉食何須羨、山厨且自娛、羊羔千斛醉、漫愧党家奴」とある。これは『宋書』の古典をふまえて詠んでいるもので、武人の嗜みと文人の嗜みの違いを語っている²⁷。この「雪水烹茶」は、文人の雅事、風流として詠まれている。

3. 「聴琴烹茶」：琴の調べを聞きながら茶を煎じて楽しむ境地を詠んだ詩である。例えば「夏興三十首」（巻28）に「涼月照人人不寐、一甌香乳聴調琴」とある。ここにいう香乳とは茶のことで、唐宋時代、茶湯の白い沫が乳のように見えたために、よく茶湯を「香乳」・「細乳」と表現している。ちなみに「乳甌」も、そうした茶湯を満たした茶碗を表現していた²⁸。

琴と茶をあわせ詠んだ有名な詩に、唐の白居易

（772－847年）の「琴茶」²⁹がある。「琴棋書画」は、中国六朝以来の文人の教養の筆頭に置かれるほど、琴は嗜みの最たるものであった。たとえ楽器を弾く才がなくても、書斎の壁に琴を懸けておくことは、文人の証だと言われるほどであった。

乾隆帝も夏日の興として、琴を聴きながら、月下で「一甌香乳」を啜ったことを詩に詠んでいるが、この文人の伝統を引き継いだものであろう。

4. 「弈棋煮茗」：茶を嗜みながら囲碁に興ずる遊びを詠んだ詩である。その例として、「芳嶼圍棋」（巻27）に「漫煮蒙溪茗、閑拋賭墅棋、東山稱盛事、吟望寄暇思」とある。文人士大夫の集まりに、「弈棋」も風流な雅趣の一つであった。茶と棋をあわせ詠んだ詩は、唐宋詩詞の中にも見える。たとえば、黄庭堅の「誰共茗邀棋敵」（「雨中花」『全宋詞』）、陸游の「堂空响棋子、盞小聚茶香」（「晚晴至索笑亭」『劍南詩稿』巻12）等がそれである。また明人にとっても、それを嗜むことは「閑適自得」の生き方の象徴でもあった³⁰。同時に「煮茗」と組みあわせたのも明代の文人生活の特色の一つである。

5. 「爇香煎茶」：お香を焚きつつ茶を楽しむことを詠んだ詩である。例えば、「刻漏」（巻29）に「年来消得冬宵味、半是煎茶半爇香」とある。爇とは焚く意である³¹。冬の宵を過ごすのに、茶を煎じたり、お香を焚いたりすることを詠んでいる。これも明の文人の生活に欠かせない「焚香設茗」の流れを承けている³²。「孟春十日夜偶成十六韻」（巻24）に「茶沸玉壺鳴、旋裊沈香細」とあり、春の夜に水が沸き、「玉壺」が鳴く様子を詠い、茶が香と融合している雰囲気伝わってくる。

6. 「騎射瀹茗」：騎射と茶の楽しみをあわせ詠んだ詩である。「春暮西場騎射」（巻16）に「瀹茗烹山泉、即此目前景、可味華南篇」とある。騎射の帰りに山泉を汲んで茶を煎じて憩う場面を描いたものである。

7. 「明窓浄机と烹茶」：閑寂な書斎で烹茶を楽しむことを詠んだ詩である。例えば、「冬夜偶作」（巻15）に「梅月窓外横、漏滴響未了、心閑吟思生、境静俗情掃、每従物理中、略識清心道、撥火且烹茶、一杯供軟飽」とある。また「丈室」（巻15）に「……丈室有余清、寒宵正三五、紙窓近檐階、月色差可觀、地炉獸炭暖、夜永灰更聚、手擘小龍团、閑向松窓煮、讀詩品古人、心許杜工部」とある。また「夏日寄二十一叔父」（巻29）では「當窓茶罷試龍寶」と詠んでいる。「破秋」

(巻27)には「瀾茗煙生戸、開簾月上牀」とある。すべて月光のさす明窓浄机の下で茶を煎じている場面を詠んでいる。

8. 「烹茶と風景」：景色を友にして茶を楽しむ詩であり、これも「文芸と茶」に含めてよいと考える。例えば、「聴松沸茗」「流泉烹茶」「石上烹茶」の類がそれである。「聴松」(巻25)には「徐聴糸竹伝、春濤盈峡漲、沸茗満壺煎、入夜心偏静、凭参天籟禅」とある。「夏日園居即事」(巻29)に「愛客緩烹茶、坐弄流泉潔」とあり、また「六月晦日作」(巻29)に「林中閑避暑、石上坐烹茶」とある。茶そのものが一の文芸となり、「風前月下」に融和した情景を詠みあげている。

乾隆帝は皇子時代の十年間について、「苑試射」(巻27)の中で「漫憶十年事、心清一椀茶」と詠んで、喫茶への傾倒を述懐している。乾隆帝が皇子時代に諸芸に没頭した生活をふりかえったときの独白である。自分の青少年時代は、一碗の茶に心を澄ませて過ごした、との感慨を表現したものである。以上に見た八つの場面は、この独白に相応するものと言うことができる。

三、『楽善堂全集定本』に見える武夷茶と普洱茶

古来より長年の歴史を経て現代に伝わる中国茶の種類は極めて多い。様々な角度から、様々な分類法が行なわれてきた。例えば、摘む時期によって分類すれば、「明前茶」(清明節前に摘んで製茶した茶)、「雨前茶」(穀雨節の前に摘んで製茶した茶)、春茶、夏茶、秋茶、冬茶などに分けることができる。茶の外観で分類すれば、散茶(葉茶)、固型茶(磚茶：レンガの形をしている。団茶、沱茶、餅茶)、碎茶、抹茶などに分けることができる。このことは、第一節においてみたように、乾隆帝の茶詩においても確認できた。

さて、現代の中国茶は、製茶科学の確立と共に、製茶方法における茶葉の発酵の程度による「六大茶」の分類がなされている³³。現代の茶は、この製茶法等による「六大茶」(基本茶類)と再加工茶類に大別されている。「六大茶」の分類に従えば、唐宋元の時代は緑茶のみであり、明代になって初めて紅茶、黄茶、黒茶の製茶ができ、清代になると青茶の製茶が加わった。つまり清代において「六大茶」がすべて出揃うこととなる。その意味で、中国の茶文化において、乾隆時代はその完成期であったと言える³⁴。

『楽善堂全集定本』に詠まれた茶詩から、清宮貢納茶の茶類を確認できたのは「武夷茶と普洱

茶」である。武夷茶は青茶の類であり、普洱茶は黒茶の類である。

青茶は製茶の過程が複雑であり、風味も最も豊かな茶である。この青茶は主に福建省で生産される。清代貢納茶としての福建産の茶は、武夷茶がその代名詞となっている。武夷茶に属する「清宮貢納茶」もさまざまな品名がある。『楽善堂全集定本』に詠まれた三首の詩から、三種類の品名が確認できる。それぞれ三つの品名を見てみよう。

まず、「冬夜煎茶」(巻15)に「武夷茶」が次のように登場する。全詩は以下のようである。

清夜迢迢星耿耿、銀鑿明滅蘭膏冷、
更深何物可澆書、不用香醪用苦茗、
建城雜進土貢茶、一一有味須自領、
就中武夷品最佳、氣味清和兼骨鯁、
葵花玉(革夸)舊標名、接筭峯頭發新穎、
燈前手擘小龍團、磊落更覺光炯炯、
水遞無勞待六一、汲取堦前清冽井、
阿僮火候不深諳、自焚竹枝烹石鼎、
蟹眼魚眼次第過、松風欲作還有頃、
定州花瓷浸芳緑、細啜漫飲心自省、
清香至味本天然、咀嚼回甘趣逾永、
坡翁品題七字工、汲黯少臆寬饒猛、
飲罷長歌逸興豪、舉首窓前月移影。

この詩は、冬夜に読書の友に、酒ではなく茶を選んだが、茶の味を自ら吟味したところ、「武夷品最佳」(武夷茶の品は最もよい)として、それを楽しんだことを詠んでいる。

その武夷茶は、武夷山の三十六峰の一つである接筭峯から採った茶であった。煎茶のため、水を汲んできたが、湯の沸かし方を侍童がよく理解していなかったので、帝自ら竹枝を焚いて石鼎の湯を沸かした。水を沸かすと初め小さい蟹目状の泡が出て、やがて魚眼ぐらいの泡が立ち、松風が鳴るような音が聞こえてきたら、そこで茶葉をいれ、定州の花瓷茶碗で茶をゆっくりと啜った。かくして「清香至味」なる武夷茶の独特の風味を楽しんだことを詠いあげている。

乾隆帝の「冬夜烹茶」からも、清代には武夷茶が最高にして不動の位置を得ていたことが知られる。また乾隆帝が、各種の貢納茶の中でも、とくに武夷茶に心を傾けていることを、この詩からも窺うことができよう。

同じ福建省には「橄欖茶」という名の清宮貢納茶があった。「橄欖茶」(巻27)に関する詩には以下のものがある。

吹雪磁甌絶点瑕、新烹異品味尤嘉、
山厨漫説玫瑰露、高閣初嘗橄欖茶、

興入盧詩風滿腋、書澆邊腹響鳴車、
武夷応喜添知己、清苦原来是一家。

南宋の陸游（1125－1210）の「午坐戲詠」に「貯葉胡芦二寸黃、煎茶橄欖一甌香」とあり、また「夏初湖村雜題」に「寒泉自換菖蒲水、活火閑煎橄欖茶」とある³⁵。橄欖と一緒に茶を煎ずることが古来の茶俗の一つであると判る。

清代の料理書『調鼎集』（1750年）にも「橄欖茶」が載っており、「橄欖數枚、木錘敲碎、同茶入小砂壺、注滾水蓋好、少停可飲」と記されている³⁶。橄欖（オリーブの果実）を用いる茶であるが、橄欖を數枚、木槌で粉碎し、茶葉と一緒に小さな砂壺に入れ、滾水を注いで蓋を閉め、しばらく置くと飲める、と記している。

乾隆帝作の「橄欖茶」を見れば、武夷に産する茶を用いていることが判る。乾隆帝も初めてこの珍しい品を煎じ、高閣で嘗味したところ、盧仝の詩が心に浮かんだが、武夷茶が知己を添えた喜びを詠んでいる。

三首目は、夏の日に「鄭宅茶」を煎じたことを、「鄭宅茶」（卷30）と題する詩に、次のように詠んでいる。

榴枕桃笙午晝賒、紅蘭香細透窓紗、
夢回石鼎松風沸、先試冰甌鄭宅茶、
水辺何須古辣泉、滿杯香露侍兒煎、
浮瓜沈李渾無事、為詠盧仝七椀篇。

鄭宅茶とは、清宮貢納茶として珍重され、雍正帝も恩賞として臣下にそれを与えた記録がある³⁷。楊復吉『夢闌煩筆』（1810年前後）に「建安鄭宅茶。近推為閩絕品。然古今譜茶事者。概未之及。前人亦從無題詠」とある。福建省産の絶品の茶であることが判る。郭柏蒼（1815-1890）『閩産録異』にも「国朝閩茶入貢者、以鄭宅茶為最」と記されている。この鄭宅茶は、それ以前の文献には言及されていないし、詩にも詠まれていない貢納茶である。清宮貢納茶となったこの「鄭宅茶」が、福建省の建安郊外に産するか、それとも興化府城外（現莆田仙游県）に産するかについては不明であるが、福建に産する茶であり、しかも絶品であることには変わりがない。

次に、清宮貢納茶の一つの特色をなす普洱茶は、雲南普洱府に産する茶の総称である。その品質の良さによって、清宮貢納茶の中で最も重要な茶となった。清代前期にその最盛期を向かえ、需要が多かった。喫茶に用いる以外にも外国使節、大臣へ下賜された。その効用にも注目され、宮廷の日常生活に大量に用いられた³⁸。武夷茶と並ぶ「名揚天下」の名茶であった。

しかし、乾隆帝が詠んだ茶詩の中には、わずか次の1首「烹雪用前韻」（卷19）が残されているだけである。『樂善堂全集定本』にあるこの普洱茶の詩は、普洱茶茶史の考証に意義がある³⁹。以下にその詩の全文をみる。

瓷甌淪淨羞琉璃、石鑪敲火然松屑、
明窓有客欲澆書、文武火候先分別、
瓮中採取碧瑤瑛、圓鏡分光忽如裂、
瑩徹不減玉壺冰、紛零有似瓊華纈、
駐春纔入魚眼起、建城名品盤中列、
雷後雨前渾脆軟、小團又惜雙鶯坼、
獨有普洱號剛堅、清標未足誇雀舌、
点成一椀金莖露、品泉陸羽應慚拙、
寒香沃心俗慮蠲、蜀箋端研几間設、
興來走筆一哦詩、韵叶冰霜倍清絕。

この詩は、晨に雪を解かした水で普洱茶を煎じて楽しむ過程を描いている。まず、瓷器の茶碗を用意し、石釜をかけて松の木を燃やし⁴⁰、火の具合を調節しながら、甌から雪の塊りを取り出す。魚眼の水泡が立つようになったら、竹製の貯茶器（建城）に茶の名品を並べる。雨前茶などの脆弱さに比して、普洱茶は剛堅さを具えている。一椀の金色の仙露を煎じたが、この茶を前にすればかの陸羽も自らの茶を恥じるだろう。普洱茶の香りで心が潤い、俗慮を除き、興を覚えてきたので詩を吟じたと詠んで、普洱茶の素晴らしさを称えている⁴¹。

おわりに

本稿では、乾隆帝皇子時代の詩文集『樂善堂全集定本卷』を中心に、35首の茶詩を選び出し、乾隆帝の茶学の教養、烹茶の技芸、禪茶韻への傾倒を考察した。

清代の乾隆期に喫茶文化は爛熟期に入り、緑茶だけでなく、武夷の烏龍茶や普洱茶など、茶の種類が広がっていたことが、乾隆帝の皇子時代の茶詩から検証できた。乾隆帝の御製詩集に詠まれた貢納茶の種類は史上最も多く、その生産地域も前代より広がった。また、清朝の宮廷で喫茶する茶が多様であったことが見てとれた。乾隆帝の茶学の教養は、古典の研鑽と清宮での実際の喫茶の経験から獲得されたものであった。品茶の繊細な所まで拘り、「致為精雅」⁴²といわれるほど、喫茶の蘊奥を窮めるに至ったことを明らかにした。

冒頭に述べたように、茶文化は明清時代を一括りにして論ぜられることが多かったが、本稿は、清代には明代にはない新たな茶文化の展開があったことを指摘した。その違いは、明代では宮廷

や政権に関係する人物が喫茶活動にそれほど関心を示さなかったのに対して⁴³、清代では宮廷の中で皇帝が率先して喫茶に関心を示したところにある。

ところで、これらの茶詩は難解で、さらに検討する余地があり、のちに青茶・黒茶となる武夷茶、普洱茶の品名と産地は、詩中から確認できたものの、その製茶過程についてまだ確認できていない。これらの問題に関して、他の資料をあわせて照合し考察することが今後の課題として残されている。

さらに乾隆帝即位後の茶詩の分析は次稿に譲り、新たな「貢納茶」およびそれに関する茶詩の考察を通して、清朝中期における宮廷茶文化の諸相を検討したい。同時に清代宮廷における多様な飲茶文化が、明代までの中国喫茶文化をどのように受け継ぎ、いかに発展させたか、こうした問題をさらに深く考察したいと考えている。

謝辞

本研究は、学校法人東海大学2009年度「総合研究機構研究奨励補助金」を受けて行ったものである。また同年度の「産学協働女性キャリア支援東海大学モデル女性研究支援」の「研究支援員派遣制度」を受けて得た研究成果の一部である。この研究奨励補助金と「研究支援員派遣制度」の支援、および研究支援員黨彩綺さんに心から感謝の意を表したい。

註：

- 1 熊倉功夫『中国茶文化大全』農山漁村文化協会、2001年、にも中国茶文化を時代区分する際、「明・清代の茶文化」として扱っている。
- 2 高橋忠彦「中国茶史におけるロバート・フォーチュンの旅行記の意義」『東京学芸大学紀要 第2部門、人文科学』41、1990年。
- 3 杉村勇造『乾隆皇帝』自序、二玄社、1961年。
- 4 戴逸「影印清高宗（乾隆）御製詩文全集序」『清高宗（乾隆）御製詩文全集』中国人民大学出版社、1993年、P.1。
- 5 詩の史料としての活用については、黨武彦「方觀承撰『薇香集』について一詩を史料とした乾隆帝政治史の再構成」『熊本大学教育学部紀要』第57号、人文科学 2008年、参照。
- 6 テキストは『清高宗（乾隆）御製詩文全集』（以下『御製詩文集』とする）中国人民大学出版社、1993年を用いる。
- 7 庄昭「朱自振序」『茶詩 300首』南方日報社出版社、2003年、P.9。
- 8 朱世英編『中国茶文化辞典』安徽文芸出版社、

1992年、P.548。

9 鞏志「清朝乾隆皇帝詩贊建茶」『農業考古・中国茶文化専号』26、2003年4月。黄桂樞「乾隆帝品吟普洱茶詩の搜集考証研究」『民族茶文化』9、2007年第1期。

10 現代「製茶科学」の確立と共に、製茶方法における茶葉の発酵の程度による緑、黄、青、白、黒、紅茶の「六大茶」の分類法が陳椽によって提出された。陳椽『茶葉通史』農業出版社、1984年、P.238。

11 鞏志『中国貢茶』浙江攝影出版社、2003年、P.2。

12 沈德符（明）『万曆野獲編補遺』卷一「供御茶」条に「上以重勞民力、罷造龍團、惟采芽茶以進」とある。また談遷（明）『棗林雜俎』にも「宋元時所貢、必碾而揉之、压以銀板、為大小龍團、明初以重勞民、罷造龍團、惟采芽茶以進」とある。

13 「清茗一杯潤舌本」とある。

14 雨とは穀雨で、穀物を育てる雨の意であり、二十四節の一つである。農曆（旧曆、太陰太陽曆）の三月上旬で、雨前、即ち穀雨節の前である。雨前茶は、穀雨節の前に茶摘みし、造った良い茶のことである。現在の曆で4月20日頃。清明と立夏の間となる。

15 原文は「穀雨前後收者為佳」とある。許次紓（明）『茶疏』に「清明太早、立夏太遲、穀雨前後、其時適中」にも同様な見解を述べている。

16 『樂善堂全集定本』では年列がはっきりしていないが、年号を付けている詩や四季の順列によって推断すれば、この年であろうと考えられる。

17 孫文良・張傑・鄭川水『清帝列伝 乾隆帝』吉林文史出版社、1993年、P.4。

18 頼功欧「論乾隆茶詩の儒、釈、道理趣と芸術格調」『農業考古』21、2001年。

19 1985年に北京芸術博物館が境内に設置され、清代古建築の保護に努めている。

20 王河「從『御製詩文集』看乾隆の茶文化活動と品泉理論」『農業考古』27、2004年、P.216。

21 「茶沸玉壺鳴、旋裊沈香細」とある。

22 茶鑪とは「ちゃとう」という。唐詩にその語を見ることができる。いずれも郊外にて煮茶の時に用いる茶道具の詩語である。茶鑪、茶釜、茶鍋と同じ役割で、即ち水を煮る茶道具である。茶鑪、茶釜より浅くて平たい鍋状のものである。簡易で、郊外における煮茶にて用いることが多く、詩語として文人の風流を連想させる。

23 高濂（明）『遵生八箋』に「建城、以簞（じゃく）為籠封茶、以貯高閣」とある。黄履道（明）『茶苑』にも「貯茶簞籠也」とある。

24 『周礼』「保氏」に「六藝、禮、樂、射、御、書、

数」とある。

²⁵ 陸紹珩（明）『醉古堂劍掃』卷五。

²⁶ 王河「從『御制詩文集』看乾隆の茶文化活動と品泉理論」『農業考古』27、2004年、P.216。

²⁷ 『清異録』の著者陶穀（903—970年）についての逸話である。『宋史列伝』にも陶穀のことを載っている。宋『緑窓新話』卷二には『湘江近事』（無名氏）に「陶穀学士、嘗買得党太尉家故妓、過定陶、取雪水烹茶、謂妓曰、党太尉家必不知此、妓曰、彼粗人也、安有此景、但能銷金暖帳下、淺斟低唱、飲羊羔美酒耳」とある。

²⁸ 蘇東坡の『寄周安孺茶』に「乳甌十分滿、人生真局促」とある。また宋の揚万里的『謝傳尚書惠茶啓』に「啜香乳」とある。

²⁹ 「琴茶」に「琴裏知聞唯淥水、茶中故舊是蒙山。窮通行止長相伴、誰道吾今無往還。」とある。

³⁰ 呉智和『明人飲茶生活文化』明史研究小組刊行、1996年、P.211。

³¹ 馮桂芬（清）『六烈祠記』に「乃集五人法座前焚香頂礼」とある。焚香頂礼とは「焚香頂礼」のことである。

³² 文徵明（明）『真賞齋図』に「焚香設茗、…玉軸錦標、爛然溢目」とある。

³³ その他、茶の形状によって、散茶（葉茶・芽茶）は、片茶、針形茶、珠茶、雀舌茶、毛峰茶などに分かれる。また産地、流通（輸出、内需、辺境など）によるものなどがある。陳椽『茶葉通史』農業出版社、1984年、P.238—240。

³⁴ 清朝の文芸について、「政治的に清朝の基礎を成した康熙帝であり、絵画は康熙時代、陶器は康熙・雍正時代が清朝の芸術として興味深い、乾隆時代は完成期であるからすべて豪華であった」と杉村氏は述べている。杉村勇造『乾隆皇帝』自序、二玄社、1961年。

³⁵ 『劍南詩稿』

³⁶ 王仁湘『飲食与中国文化』人民出版社、1993年、P.173。

³⁷ 『宮中檔雍正朝奏摺』20輯、P.32、雍正十年六月初五日、吏部尚書提督江南河道提督軍務嵇曾筠奏摺、に「恩賜臣鄭宅茶拾瓶」とあり、同21輯、P.909、太子太保文華殿大學士兼吏部尚書仍管理江南河道總督事務嵇曾筠奏摺に「武彝茶壺、鄭宅茶壺」を賜われた、とある。

³⁸ 普洱茶の効用については、傅超の「清宮普洱茶」（『明清論叢』第八輯、紫禁城出版社、2008年）により、清宮廷では主に日常生活用品や薬用品として、また年中行事や祝賀会、外交礼儀などにおける贈答品として使用されていることが分かる。そして、日常生活では、食事後の飲茶と口の嗽ぎとして普洱茶が使われていた。また

普洱茶のもつ「温性」を生かし、身体を温める飲み物として、「冬に普洱茶を飲む」（「冬飲普洱」）ことが清の宮廷の慣習となった。その薬用としての効用は、「消化を助ける」、「痰を取り除く」、「発汗」、「解毒」、「炎症を和らげる」などがあるとされる。普洱茶は他の種類の茶より多くの効用があるとして、清の宮廷ではとくに重視されていた。

³⁹ 黄桂樞「乾隆皇帝品吟普洱茶詩の考証」『民族茶文化』2007年第1期。

⁴⁰ 元・張渥『題了堂上人煉雪軒』に「雪消成水固日異、煮水作雪真為奇、吾師悟此煎茶法、掬泉敲火須臨時、手轉清風弄明月、幻作一同滋味別。試看碗面乳浮花、熱惱消除置氷鉄」とあるように、古来煎茶には新鮮の泉を酌んで、その場で火を焚くという風流な慣習があった。

⁴¹ 詩の注釈について、丁以壽「乾隆皇帝烹雪詩解注補正」『農業考古 中国茶文化専号』2007年5月を参照した。

⁴² 乾隆46年の「詠嘉靖雕漆茶盤」の詩註に用いている言葉である。『御製詩四集』卷78

⁴³ 呉智和『明人飲茶生活文化』明史研究小組刊行、1996年、P.212。